

報告書



第20回 福祉教育セミナー

「私たちのまち逗子」における 福祉教育の展望

～インクルージョンと共生の文化づくりに向けて～

令和5年12月27日 開催



「福祉」 = 「ふだんのくらしのしあわせ」

「福祉」とは、特別な人のものではなく、一人一人の暮らしやすさや、みんなが幸せになるための仕組みです。逗子市社会福祉協議会（以下、社協）では、『誰もが安心して暮らせるまちづくり』に向けて、学校を含む地域の場において、福祉意識の醸成や、地域生活課題の解決に向けたアプローチを、地域住民や専門職など、様々な立場な人たちと一緒に取り組んでいます。

その福祉の検討・実践のプラットフォームである「福祉教育チーム」が毎年主催してきた「福祉教育セミナー」は、今回、20回目の開催となりました。

主催：逗子市社会福祉協議会 福祉教育チーム
後援：逗子市、逗子市教育委員会



「私たちのまち逗子」における 福祉教育の展望

～インクルージョンと共生の文化づくりに向けて～

参加者：59名（会場46名/オンライン13名）



「福祉教育セミナー」は、福祉教育チームメンバーが主体的に企画や調整、当日の司会進行を含む運営を行ってきました。



総合司会：田中美乃里さん
（福祉教育チーム）

「福祉教育セミナー」は、これまでの20年間、学校での福祉授業による子どもたちへの学びや、逗子の地域活動と福祉の結びつき、また、地域福祉の課題に対して、解決のための福祉の仕組みを住民とともにどのように作りだせるか…等々、福祉の理念（研究的視点）と実際の活動（実践的視点）を交錯させ、より多くの人と意見交換を行い、賛同者を増やしていくために開催してきました。



絵本にちなんだグループ札（毎回、手作りの札で参加者をお出迎えてきました）



「絵本・アートプロジェクト」による絵本の展示（会場後方にて）

第1部

パネルトーク 「私たちのまち逗子」における福祉教育の実践と展望

絵本・アート、学校実践、地域活動の3プロジェクトから、これまでの福祉教育実践から見えてきたこと、今後の展望を発表しました。

【福祉教育チームのプロジェクト活動】 （2009年から開始、継続中）

福祉教育の取り組みを、学校実践だけにとどまらず、地域を基盤として人々が福祉を理解し、学んだことを行動に移していくことができるように、福祉教育チームメンバーが主導者となり、他、様々な立場や団体、地域住民が加わり、具体的な取組み（プロジェクト）を行ってきました。

そして、そのプロジェクトの実践報告をセミナーで行うことで、福祉教育の理念と多様な実践を多くの方と共有し、循環させてきました。

2021年度からは、逗子に暮らす誰もが「この逗子の地域に住んで良かった」という実感を持ち、「ふだんのくらしのしあわせ」について考える人や活動する人の裾野を広げていくことを目的として、3つのプロジェクトに取り組んできました。

3カ年計画としてスタートした3つのプロジェクト。

絵本・アート

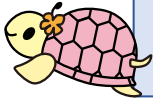
学校実践

地域活動

それぞれ、「インクルージョンと共生の文化づくりに」に向けて実施してきた実践について、福祉教育セミナーでは、下記テーマのもと共有し、検討を重ねてきました。

「福祉教育セミナー」
第18回テーマ「課題共有」
第19回テーマ「（ふくしの種まき）実践」
第20回テーマ「展望」





「絵本を活用した実践と展望 ～絵本の持つ可能性～」

絵本・アートプロジェクトより

【絵本・アートプロジェクトとは】

絵本・アートを通して、これまでの福祉の捉え方をより深め、そして福祉教育の実践を、学校などの特定の場にとどめず生活の身近な場へ広げ、また子どもからお年寄りまで幅広い世代へ広げていくことをねらいとしています。

【絵本『ことばのかたち』の読み聞かせ】



作:おーなり由子 (講談社)

報告の始めに、読み聞かせを行いました。
絵本収集、リスト化した中から選書。
じっくり「ことば」と向き合える絵本です。

【実践報告】

「絵本・アートプロジェクト」は、「絵本風」資料で報告しました。



絵本・アートプロジェクト

絵本収集、絵本リストの作成

絵本から多くのメッセージを受けてきたプロジェクトメンバーが、これまで収集した絵本の中から、テーマの軸である「インクルージョン」につながる「そのまま」「多様性」「想像性」「やさしさ」「寄り添い」「つながり」といったキーワードで絵本を選びリスト化しました。

とはいえ、絵本をキーワードで分類する意図はなく、それぞれの絵本から多様なキーワードが浮かびあがればよいと思っています。

初版

増補版

絵本を活用した場

逗子トモイクフェスティバル

—逗子文化プラザにて—

2022.3.19 (土) 20 (日)	来場者数 142名
2023.3.25 (土) 26 (日)	来場者数 209名

絵本リスト (初版) 掲載の32冊を中心に展示
読み聞かせ『オレ、カエルやめるや』など

—来場者の感想より一部紹介—

「人それぞれが持っているちがう価値観を、互いにならう理解すべきさを小さい子どもでもわかりやすく描かれていた」
「多様な価値観がある時代を色濃く写していた」

絵本コーナー設置

2023.4～

福祉会館1階にて絵本リスト (初版) に掲載の32冊を展示

まちライブラリーへの登録

2023.6

まちライブラリー@みんなの絵本

一般社団法人まちライブラリーは、「本」を通じて「人」と出会うまちの図書館活動を行っています。個人や小規模団体が自宅、カフェ、事務所、美容室、社寺、病院、商店になった学校などの一角に本棚を設置し「まちライブラリー」として登録をして、本の貸し出しなどをを行います。場所を待たずに公園などで活動する人もいます。

逗子を旅する絵本

実施期間 2023.7月末～11月末

人から人へと絵本が手渡され、絵本を通して人と人がつながっていく実践で、思いがけない絵本との出会いを楽しみ、また、読んだ方同士のコミュニケーションを回り、絵本を通して福祉のとらえ方を深め広めたいという想いで実施しました。

18冊の絵本が出発

『空の飛びかた』『ぼくがラーメン食べてるとき』『どんなかんじかなあ』『へいわとせんそう』『ことばのかたち』『ハッピー・ハグ』『なぜあらそうの』『あつかったらぬげばいい』『オレ、カエルやめるや』『Red』『みえるとかみえないとか』『ぼく モグラ キツネ 馬』『ホオナニ、フラおどります』『ジュリアンはマーメイド』『わたしはあかねこ』『にげてさがして』『とんでいったふうせんは』

大人のための絵本ワークショップ

—市民交流センターにて—

2023.12.07(木)

絵本の読み聞かせ、語り合い 参加人数5名

『てん』『エロイサと虫たち』『Life』

—参加者の感想より一部紹介—

「絵本の読み聞かせの深さを感じることが出来ました。新しい世界に入ったような気持ちになっています。」

「3つの絵本の読み合わせは人生最初のたいげだったのヨ♡ なんてたのしくおもしろくすごいためになる貴重な貴重な時間だったのヨ♡♡ また絵本をみようね 読もうね 話し合おうね。みんなあつまれ〜」

絵本リスト (初版・増補版) 掲載の55冊を中心に展示

【今後の展望】



「絵本・アートプロジェクト」発表者
津留崎寿美子さん 小田鈴子さん 飯野幸さん
(地域活動者)

- ・ 今後は「絵本の力」を活用して、学校実践プロジェクトとの連携をしていきたいと考えています。また、地域の中での絵本を活用した場づくりや啓発を様々な形で地域活動とも連携していきたいです。
- ・ この3年間で基礎のようなものができたと感じています。今後も絵本の良さを届けていきたいです。



学校実践プロジェクトとは

- ・はじめは、2009年度「福祉教育セミナー」のグループワークからの発案。
- ・2010年度、「こころプロジェクトチーム」発足。当初、精神障がい理解に対する検討から開始。そして、「(外から見て分かりづらい)生きづらさを抱えている人」への理解を切り口に、「ともに生きる力を育む」ための授業実践を中学校向けに作成。
- ・2013年度、授業実践「発達障がいの理解」(逗子市立沼間中学校3年生)実施。
- ・以降、沼間・逗子・久木中学校に、授業実践を拡大。

【テーマ:1年生「発達障がい」 2年生「LGBT」 3年生「認知症」】

- ・2021年、「学校実践プロジェクト」発足。「こころプロジェクトチーム」の中学校実践を進展させ、これまで社協調整としていた小学校の実践も管轄し、連続的なプログラムの構築を目指し取り組んでいる。

メンバー

教育委員会、福祉専門職、学識経験者、地域活動者、人権擁護委員、視覚障がいの当事者(13名)

実践(検討)内容

- ①中学校での福祉授業のプログラムづくり
- ②小中学校における福祉授業の連続性・継続性について

【小学校での実践】

障がい当事者の方、ボランティア、地域の方に授業に協力いただいています。

○交流するプログラム

- ①出会う、相手を知る
- ②共に体験する、活動する

○学びを深めるプログラム

自分のことや友達のことを考える

【中学校での実践】

プロジェクトメンバーが、各中学校で、2～3コマの授業を行っています。

○主題

「誰一人取り残さない逗子のまちをつくる」

- 1年生:発達障害の方への理解から
- 2年生:LGBTの方への理解から
- 3年生:認知症の方への理解から

「今後の展望について」

学校実践プロジェクトとして、積み重ねてきた数々の実践や、実践後の子どもたちの様子を振り返り、これからの活動への期待と方向性について語られました。

授業実施後の生徒の感想や、まちで見られる子どもたちの様子から、福祉教育の意義や効果は実感できています。さらに、実践後の子どもたちの様子(変化)について、先生とやり取りをする機会を設け、よりよいプログラムにしていきたいと思えます。(小林)



「学校実践プロジェクト」パネルトーク発表者

小林倫さん

石塚敏樹さん

(湘南の風もやい)

(れんげの里)

(1) 出会いのきっかけづくり

福祉の授業を通して、子どもたちは、同じ地域に暮らす様々な方を知ることができます。そして、ふれあいや関わりの中から、様々な方に関心をもち、自分との接点を感じたり、考えることができます。

今後も、そのような、子どもの頃に必要様々な出会いを意図的につくっていきます。

(2) 学校を含む地域の場での拡がり

授業は、福祉を知る、考えるきっかけであり、人間関係や社会関係を結ぶ第一歩となります。

そのため、今後も、単発の授業とならない、継続的な学びの場をつくっていきます。そして、学校での学びを地域につなげていきます。

(3) 継続した実践の成果

現在、主に取り組んでいる公教育での実践では、逗子のより多くの子どもたちが、福祉を聞く(触れる・考える)機会となっています。これからも、継続して実践を重ねていき、「インクルージョンと共生の文化づくり」を子どもたちから拡げていきます。

今、学校で学んでいる子どもたちが10～20年後に、逗子で社会活動を営んだり、生活したりします。福祉教育の学びが、その礎となり、どこかできっと、生きてきます。学校現場の方も一緒に、子どもたちの福祉意識の醸成、また実際の行動につなげていくことを、逗子のまちの将来を含めて考えていきましょう。(石塚)



パネルトーク③

「地域での実践と展望 ～つながりを生むために～」

地域活動プロジェクトより

地域活動プロジェクトとは

地域活動を通す中で、地域福祉の担い手や福祉の知識・想いを持って活動する人を増やし、育てることを目的とするプロジェクトです。

検討内容

- ・助け合い、生かしあう地域の実現
- ・人づくり、仕組みづくり

【実践報告】

メンバー：地域の活動者、自治会・町内会の活動者（7名）

1年目（令和3年）

- ・子育て世代から地域への提案：「楽しいでつながる」がキーワード
組織のない地域の不安感を楽しいイベントを開催することで住民同士をつなげる試み
しかし…コロナの流行がおさまらずイベントの集会は難しかった。

2年目（令和4年）

- ・イベント集会が無理なら地域課題を掘り起こそう。
住民のだれもが被災者になる「大災害」から地域の現状を見ていこう。
結果：防災への関心は高い。が、組織のない地域で災害情報が行き渡っていないことが見えてきた。→地域の掲示板が必要！
- 令和4年09月「逗子7丁目 防災に関する意識調査アンケート」
配布世帯数355（回答数112）
- 令和4年12月 参加者：9名 「アンケート報告会（交流センター）」
- 令和5年03月 参加者：6名 「掲示板づくりイベント（新宿会館）」



「地域活動プロジェクト」発表者
龍村敦子さん
（地域活動者/山の根自治会）



イベントで作成した掲示板

3年目（令和5年）

- ・集まる住民が少し増えてくる。「街歩き」「川遊び」などイベントの提案もあがるが…誰がやるの？
→あれ？若いキーマンあらわれたか？
⇒地域住民が自走できるようになるまで、第三者（社協やプロジェクト等）が伴走することが必要。
- 令和5年06月 参加者：12名 「地域交流会（新宿会館）」
- 令和5年09月 参加者：10名 「防災カフェ」

【今後の展望】



「地域活動プロジェクト」発表者
桑原泰恵さん：オンライン
（地域活動者）

地域活動を通して、福祉の担い手や、知識・思いをもって活動する人を増やし、地域福祉を進めていきたいと思えます。地域の中で思いのある人と出会う、またつながる仕掛け（イベント）を繰り返していく。これが地域で人を育てていくということのパターンであり、パターン化により他地域への拡がりも期待できます。

『挨拶をする相手が増えると自分のまちに思えてくる』
まずは知り合うこと、顔見知りになることから。

講師：日本福祉大学 学長 原田 正樹さん

○基調講演の時間において、原田正樹先生にコーディネートいただき、これまで返子市の福祉教育をつくってきた人たちと原田正樹先生とで、返子市の福祉教育の20年間のリフレクションをし、そして、これからの返子での福祉教育についての語り合いを行いました。



福祉教育は、「共生の文化」づくり。それは日々の自分たちの生活や活動の中で醸成させていくものであり、20年かけてやっとファーストステージが終わったと思います。セカンドステージでは、根底は「ふだんのくらしのしあわせ」を大切にしながら、今までと異なるアプローチとして、テーマ型や戦略型で、世の中の動きに即してやっていきたいと思っています。

(山西優二さん：福祉教育チーム創設時から
現在までチーム座長またはメンバーとして参加)

立ち上げ時から、福祉教育チームは、行政や教育委員会を含めた様々な立場の人が共に検討・実践する場としました。これまで、非日常が日常となる震災の時に、「ふだんのくらしのしあわせ」を持続させるためにはどうしたら良いのか等、原田先生に様々な場面をまとめてもらい、共に生きることにつながってきたと感じます。

(小田鈴子さん：福祉教育チーム創設時の発起人。
現在は絵本・アートプロジェクトに参加)

登壇者

社会福祉法人として、福祉を伝えていくミッションがあります。そのため、施設として受け身ではなく、地域を盛り上げるために、横の繋がりが必要であると、他法人にも働きかけてきました。また福祉教育実践を通して、様々な立場の人が一つの目標に向かって活動する出会いの場に入れたと感じています。

(押川哲也さん：2010年から現在までチームメンバーとして参加/返子ホームせせらぎ)

返子の福祉教育による実践者や賛同者の数と、その拡がりや深まりは、この20年間かけての、大きな成果だと言えます。また常に、福祉教育実践の賛同者を増やし、関心層の裾野を広げていくことが必要であり、そのためには、誰もがいつでもどこでも、学びあえる環境または仕組みをつくっていくことがこれからの課題だと感じています。

(経塚由紀子：社協 福祉教育担当職員)



20年目となった今回の基調講演でも原田正樹先生からは、たくさんの言葉をいただきました。これらの言葉を、返子の福祉教育に関わる関係者・協力者、また地域住民の皆さんと共有し、返子のまちづくりを考えていきたいと思っています。

原田正樹先生からのお言葉より

【返子の力強さ(成果)】

- ・一人一人が自分の実践に基づいて、自分なりの言葉で福祉教育を語れる市民がたくさんいる。
- ・チームに当事者が入って一緒に学ぶ体制がある。
- ・福祉学習を受けた生徒が、再びセミナーに参加し、つながっていることは一人でも大きな成果である。
- ・20年間の中で、取り組む課題やテーマは変化している。「見えにくい障がい」など、時代と共に課題があり、それを「ふだんのくらしのしあわせ」に照らして、福祉の学びとして取り上げてきた経緯が見受けられる。

【福祉教育で大切なこと】

- ・大切なことは学びとリフレクション。リフレクションによって自分がやってきたことを受け止めながら、これからを考えていくことが大事である。
- ・福祉教育は、人づくりやまち(地域)づくり。価値観や意識は啓発だけでは変わっていかないため、学びが必要である。「共に生きる」をどのようにつくっていくのか。

【インクルージョンと共生の文化づくりに向けて】

- ・みんなが、考え方や価値観が異なる中で、どうやって「共に生きる」ことができるか。インクルージョンを目指すほど、自分と異なる人の存在や価値観に出会う。その立場の異なる人を正面から受け止めて、一緒に生きていくにはどうしたら良いのだろうか。多様性と表すときれいな言葉だが、その難しさに返子の福祉教育は挑戦しようとしている。
- ・ぶつかり合う利害関係では、そこにコンフリクト(対立・葛藤)が起こる。異なる人たち(違う立場やぶつかり合う利害関係)の中で、どう共に生きることができているのかに向き合っていく必要がある。

○原田正樹先生には、「福祉教育セミナー」第1回(2003年度)から20回(今年度)まで、毎年、基調講演の講師としてご講義いただきました。そして、「ふだんのくらしのしあわせ」である福祉観を、社会状況の変化や国の制度に応じてご指導いただき、また、返子の地域福祉における20年間のあゆみを見守っていただきました。

○返子の福祉教育は、「セカンドステージへ」という言葉と共に、これからも地域福祉の発展に向けて、検討・実践を重ね、見える成果を示しながら、返子の「福祉」の層を厚くしていきたいと思っています。

第3部

グループワーク

「私たちと福祉教育のこれから」

パネルトークや基調講演をふまえて、お互いに認め合い・活かし合う「私たちのまち返子」をつくるために、私たちの生活や地域活動において必要な福祉教育の取り組みを話し合いました。



【各グループの発表内容（一部抜粋）】

6つのグループは、「絵本・アートプロジェクト」が選書した絵本にちなんで名づけられています。（*グループ札は2頁参照）



返子の福祉は現在、過渡期である。みんなが「まち」で声をかけ合うことが当たり前前の風景となるのが最終地点。そこにたどり着くまでに何をしたら良いのか。誰もが、「迷惑はかけていい」と思えるような、迷惑をかけることも当たり前とみんなが思えるようになると良いのではないかと。

【あかねこチーム】

仲間と一緒に飛躍して、巻き込まれる人も増えていくことで、横（他地域・他の活動）に展開していけるのではないかと。具体的な展望として、大人の絵本の読み合いの中で、絵本の中の一場面や一つの言葉を各自が絵や文字で表すような時間や、互いに感想を話し合える時間をつくれたら良いと思う。

【カエルチーム】



絵本の読み聞かせは感動を与えられる、またきれいな絵は情緒を育てる。大人同士で語り合う時間は大切である。例えば、まちで大人向けの小さい絵本図書館をつくることや、神社等で「話しかけていいベンチ」をつくって交流を促すこと、学校での学びを生涯学習として地域で担っていくことができないだろうか。

【どんなチーム】

貧困的福祉観に陥らないにはどのようにしたら良いのか。要支援者に注力するのではなく、一般市民の意識改革をしていくことが必要。各個人が周りの人たちを巻き込んでやっていく。返子で働いている人、若者など、様々な人を取り込んでいく手立てが必要だと感じる。

【ラーメンチーム】



絵本の力を感じる。子どもたちが、絵本を通して、様々なことが見える社会になったら良い。例えば、学校や家族以外の地域の人とつながれる場や自分のことを話せる（伝えられる）場ができることを期待したい。人とのつながりが地域では薄くなっているが、コロナ禍を経て人のつながりの大切さを再確認した。

【タンタンチーム】

学校で福祉の授業を受けた子どもたちは、次は、どのようにつながっていくのだろうか。継続した取り組みや見えるものがあると良い。地域活動では、シニア世代と若い人たちが、できることを役割分担し、うまく折り合を付けながら連携していくことが大切。継続にはそれぞれの意識も必要だと思う。

【てんチーム】（オンライン）



グループワークをとおして、多くの「ことば」を集めることができました。この「ことば」一つ一つもまた『ふくしの種』だと思います。地域の方と共に積み上げてきた20年の福祉教育実践と原田先生の精神を持って、50年先、100年先に向けて紡いで行きたいと思えます。（社協 平山）

おわりに

福祉教育チーム 座長 宮脇 文恵さんより



9月に、SNSの一つであるツイッターで、とあるつぶやきが炎上しました。「ムスメちゃんが登下校で乗る電車で、電車やバスの車内放送を真似してつぶやいてる不審者が毎朝乗ってたそうで、ムスメちゃんはその都度、非常停止ボタンを押して車掌さんに筆談で告げてたら、その都度その不審者をつまみ出してくれて、ついに今週は不審者が乗ってなかったそう。」

「みんなが見て見ぬフリをする中、不審者を見掛けたら犯罪じゃなくても大人に知らせるって教えた成果が実った。」

実は、自閉症の方の85%は、「エコラリア」という症状があって、人が言った言葉の最後を繰り返したり、または、お気に入りの言葉や歌のフレーズをずっと繰り返したりします。その繰り返して心を落ち着けたりするのですが、今回のツイートは、それを知らない子どもが、不審者として毎回車掌さんに通報し、おそらく自閉症である男性が、電車に乗ることができなくなったのです。

もしも、このお母さんが自閉症のエコラリアを知っていたら、子どもに「不審者じゃないよ、楽しい気分で電車に乗っているんだよ」と教えてあげられたかもしれません。

また、多くの人を知っていれば、まちの中で出会っても、「ああ、心を落ち着けているんだな」と想像できるのではないのでしょうか。

そして、実際にふれあい、交流する機会を持つことで、お互いに「なーんだ、普通の人じゃん」とわかって、同じ地域社会で、さりげなく共に過ごせるようになるのではないのでしょうか。

「ああ、逗子に住んでいて良かった」と、どんな人でも思える街にするために、私たちは何をしたらよいのか。「そんな街になればいいなあ」と思っているだけでは、なりません。「私は、何をするのか」。その一歩が、まちをもっと幸せなまちをつくっていきます。

そのために、学校に、地域社会に、より多くの、学ぶ機会が必要です。

今回、私たちは、新たな学び合いのあり方に向かって、いったん福祉教育セミナーを閉じ、秋に再出発することとなりました。

改めまして、原田先生、20年間、基調講演をご担当くださり、本当にありがとうございました。

そして、これまでご参加くださった皆様、本当にありがとうございました。

逗子市における福祉教育は、歩みを止めません。誰もが幸せに過ごせる社会を目指して、共に願い、動いていきましょう。

【「福祉教育セミナー」を終えて】

セミナーでは、20年間の逗子の福祉教育のリフレクションと共に、参加者から自身の生活や活動との関わり・拡がり意見交換され、これからの福祉実践(活動)への期待と展望が共有されました。

今後の逗子のまちづくりにつながる福祉教育の在り方や、その拡がりについては、市全体として仕組みを構築させていく必要性があります。引き続き、関係者また地域住民と共に協議を進め、逗子の地域福祉、そして共生の文化づくりを推進していきたいと思えます。

(逗子市社会福祉協議会)

作成 : 逗子市社会福祉協議会 (2024年1月)

逗子市桜山5-32-1

TEL 046-873-8011 MAIL vc@zushi-shakyo.com



社協
Instagram



社協
ホーム
ページ

「福祉教育チームの20年間のあゆみ」を社協ホームページに掲載しています。